

「全学共通教育平成17年度実施に向けた研修会」報告

大学教育開発センター長

竹内博明

大学教育開発センター調査研究部

早川茂
中谷博之
湯山智之
長山貴之
板野俊文
岡本研正
田中道男
安井修二
稲永由紀

はじめに

本稿では、「全学共通教育実施に向けた研修会」の今年度（平成17年度実施に向けた研修会）の報告を行う。この研修会は、次年度用シラバス提出〆切の1ヶ月ほど前に、次年度全学共通教育担当教員に対して、全学共通教育を担当するにあたっての基本事項などを理解してもらう等の目的で、昨年度から始められた。昨年は講義形式+部会後とのワークショップ形式の2部制でおこなったが（詳細は『香川大学教育研究』創刊号を参照されたい）、今年は時間的制約から講義形式のみでの開催となった。

まず1. において研修会全体の概要を示した上で、2. 以降、具体的な内容について報告することにした。

1. 「概要」

平成16年12月22日15時10分から、大学教育開発センター主催による〈全学共通教育の平成17年度実施に向けた研修会〉が開催された。研修会の対象者は、本学の全学共通教育を担当する教員であったが、学外の非常勤講師の参加も多く、17年度に全学共通教育を担当する予定のない本学教員の参加もあった。研修会の概要は次のとおりである。

最初に、竹内博明大学教育開発センター長の挨拶があり、学生の実学志向にかかわらず教養教育が

なおざりにされてはならないこと、教育中心大学において一般教育が重要であること、高度専門職業人の育成にあたっては教養教育は不可欠であることの指摘が行われた（本章2.）。

第一部は、全学共通教育オリエンテーションで、武重雅文共通教育部長から全学共通教育の概論の説明があり、全学共通教育が大学の教育目標に沿うものであること、全学共通教育の沿革と主題科目、共通科目、教養ゼミ、外国語科目など科目毎の趣旨が説明され、平成18年度から全学共通教育の改革を進めることが予定されていることが説明された。そのあと、塩田修学支援室職員から次年度から変更となる点を中心に事務説明が行われた。

第二部は、「シラバスの充実と授業改善」というテーマで以下の発表が行われた。

まず、早川茂調査研究部長から「シラバス作成およびその効果に関するアンケート調査結果」と題して、平成16年度前期に全学共通教育を担当した教員に対して実施した、シラバスに関するアンケートの集計結果とその分析が発表された。昨年度に行われた全学共通教育のシラバス改革（シラバスにおける到達目標の明示、多面的成績評価、厳格な成績評価など）が徐々にではあるが定着し、授業の上にも良い効果をもたらしていることがうかがわれるとの説明があった（本章3）。

次に、安井修二調査研究部委員から「全学共通科目成績評価」の発表があり、全学共通教育の各科目の「秀」及び「優」の割合、不合格者の割合のデータをもとに、科目毎の成績評価の傾向が説明された。また、教養ゼミナールでの成績評価についても紹介され、科目間で「秀」の割合のバラつきがあり、それが成績評価ワーキンググループ（WG4）で議論されているということが紹介された（本章4）。

その次に、「ITを利用した授業改善の試み」と題した報告が行われた。

前半は、板野俊文調査研究部委員から、シラバスの改良、講義の進め方の改良、パワーポイントの活用による授業の改良、パワーポイントの長所・短所及びその解決策、ホームページによる教材の公表などが紹介された。改良を次年度にフィードバックさせていくことが重要であること、また調査研究部では希望する教員にパワーポイントによる教材作成のための支援を行う用意があることが説明された（本章5-1）。

後半は、安井委員から、授業の進行とともに書き直していくシラバスの説明があった。そのなかでは更に、パスワードを入れないと開けることができないようにしたり、掲示板を設置したりしているということであった。教材の公開にあたっては著作権に配慮しなければならず、そのためにはパスワードを入れないと読めないようにすることが必要である。そうした対応をするためには、各学部のWWWの設定が異なっているので、各学部の情報処理関係者と連携していく必要があるという問題提起も行われた（本章5-2）。

最後に、17年度の授業から導入されるシラバスのWeb入力について、近藤専門職員から説明が行われた。

2. 大学における教養教育 — 挨拶

本日は、平成17年度全学共通教育実施担当者の研修会に多数、ご出席下さいましてまことにありがとうございます。

実は、今月の初めに「法人化国立大学の教育改革戦略」と題したシンポジウムを学長主催で開催したところ、教員の参加はわずか数名であり、偶々、土曜日で、周知も不十分だったかもしれませんが、もう少し、教育改革に関心をもって集まっていたとしてもよかったのではないかと思います。本日は、会場に来てみて多数の教員が参加しているのを拝見してホッといたしました。

まず、最初に進研ゼミのデータをお見せしたいと存じます。大学全入時代を迎えて、受験生の確保、とりわけ優秀な学生の確保は大学の将来を左右する重要な事項になってきております。受験大学選別の重視ポイントについて、受験生当時のトップ10は、1位、学んだ学問を生かした就職、2位、得意科目を生かした受験、3位、大学のイメージ、4位、楽しい大学生活、5位、ネームバリュー、以下、苦手科目の配点が低い、大学の場所、興味をひかれる講義、学費が安い、就職実績と続いております。イメージとか雰囲気などの項目が目立ちます。

これに対し、大学生の今だから言えるトップ10は、1位、就職のサポート、2位、興味をひかれる講義、3位、研究のための設備・資料、4位、通信機器やパソコン、5位、学んだ学問を生かした就職、以下、就職実績、資格取得のための制度、楽しい大学生活、実用的な授業内容、企業とのパイプと続いております。大学において学べることとその質が重視されており、とくに就職に関連したことなど、実学主義的というか実利主義的な内容が優先されております。

これは、時代の背景というか、就職難の社会状況を反映していると考えられます。ただ単に就職率がいい大学というのは、比較的小規模な私立大学であることが多いのでありまして、そういう大学に受験生が殺到しているかといえば、必ずしもそうではなく、いわゆる総合大学であって、かつそういう内容が備わっているというか、就職率がいいというのが理想ではないかと思われまます。

しかしながら、アメリカの著名な教育者であるアーネスト・ボイヤーは学士教育課程への問いかけのひとつに、リベラルアーツに対立して、就職第一主義が大学を支配していないかという問いかけを挙げています。これは、決してそうであってはならないという裏返しであり、やはり、リベラルアーツという教養的な教育と実学的な教育がある程度、バランスを取っていないといけないということでありまして、大学選別のポイントが実学主義重視に傾いているからといって、教養教育がなおざりにされるべきでないというのがひとつ言いたいことでもあります。

次に、最初にお話ししました「法人化シンポジウム」で月刊Between編集長の足立 寛さんにお示しいただいた、いわゆる初年次教育の捉え方という切り口について少し、ふれてみたいと思います。大学を研究型大学（コンペティティブ）、教育的大学（センクティブ）、意欲喚起型大学（オープンドア）に分類し、この3種の大学パターンで、ガイダンス、知的学習、カリキュラム、高大接続、教養教育にどのような違いがあるかを示したものであります。その切り口に興味を引かれたのでご紹介した次第です。本学の多くの学部は、教育型大学であり、一部の学部は研究型大学であります。教育型大学では教養教育はジェネラル・エデュケーション（知識中心）であり、研究型大学ではリベラルアーツである、というそういう仕分けができるのではないかと思います。

三番目に、この12月20日に中教審が「我が国の高等教育の将来像」の中間報告を出しています。それによりますと、大学は全体として7つの機能を有しており、その4番目に総合的教養教育が挙げられています。勿論、各大学の選択により、保有する機能や比重の置き方は異なります。

国際基督教大学の教養学部は、日本で唯一の本格的リベラルアーツ教育を目指している学部であります。その取り組みは、昨年度の特徴ある大学教育支援プログラム（GP）に採択されています。そ

の中での「学術基礎教育の取り組み」は内容的には興味深いと考えられます。それは、批判的分析思考能力（Critical Thinking）などの基本的アカデミック能力を徹底的に叩き込む、しかも、英語で行う、ということが骨格になっているということでもあります。

私は、この国際基督教大学が成功している、というか認められているのは、こういった教養教育がいわゆる専門教育にとって不可欠の基本的事項である、ということを経験的に認めさせたということではないかと考えております。従って、先ほど申し上げた「学術基礎教育の取り組み」をもう少しわかりやすい言葉でいいますと、1. 如何にして論理的、批判的思考力を培い、2. それを基礎に、主体的問題を設定し、3. これを解決していく能力の開発、言い方を換えると、“考える力”を如何に構築していくか、ということでもあります。これが、教養教育に対する国際基督教大学の基本的な考え方です。ここは、当然4年生大学でありますから、我々のように1年半とか、2年という期間ではありませんので、単純に比較すべきではないという意見は、当然あると思いますが、教養教育に対する考え方というか、精神は参考になるのではないかと考えております。

因みに、この4年生の教養学部を卒業した学生の2%は弁護士になり、医師になるのも2%、また、25%は研究・教育従事者になるといわれています。ということは先ほど申し上げましたように、教養教育がベースになって、さらに高度の専門教育に発展していくという、ひとつの実験的なデータではないかと思っております。

それから、このGPの取り組みの中で、評価されていることではありますが、卒業生が積極的に、自分たちの大学で学んだことについて、例えば、国際感覚、一般教育、コミュニケーション能力、人間関係、問題発見能力といった項目について、半分以上の学生が大変有効だったと、有益であったと評価しています。ですから、そういうことからすると、進研ゼミのデータでも、もう少し、教養教育が評価されてもいいのではないかと思うのですが、総合大学にとっては、ほかの事項とあまり差がないということかもしれません。

本日は大学の教養教育について最近、考えていることをお話させていただきました。

3. シラバス作成およびその効果に関するアンケート調査結果

昨年度の研修会ではシラバス改善というテーマに基づき、調査研究部で作成したモデルシラバスを説明しました。そのモデルにしたがって、平成16年度全学共通科目のシラバスを作成し、授業を実施しました。そこで、前期に授業を実施した教員に、シラバス作成時に授業の到達目標を書くにあたっての感想や成績評価法の記載等についてのアンケート調査を行いました。また、実際に授業を実施したあとの評価やシラバスへの感想等もあわせてアンケート調査を行い、その結果を取りまとめたので、ここで報告します。

アンケート回答者の総数は104名であり、その内訳は教育学部16、法学部5、経済学部7、医学部19、工学部13、農学部10、センター等9とほぼ全学にわたって回答されています。また、担当科目も主題科目26、共通科目26、教養ゼミ25、外国語24など科目に偏りなく回答されています。

昨年度の研修会への参加を聞いたところ、参加したのは43名と約4割でした。参加した43名のうち、分科会への参加は主題科目、共通科目、教養ゼミとほぼ同数でした。

研修会に参加した教員にこの研修会がシラバスを書くために参考になったかどうかお聞きしたところ、図1に示すように、「非常に」と「ある程度」をあわせると70%ほどになり、かなりの方が参考になったと答えています。昨年度の研修会を企画した調査研究部としてはホッとした思いというところではあります。

図1 研修会はシラバス作成の上で参考になったか

非常に	ある程度	あまり	全く
7	22	10	3
(17%)	(52%)	(24%)	(7%)

104名のアンケートに回答した方全員に「シラバスに授業の到達目標を記載するにあたり、労力を要しましたか」ということを聞いたところ、図2のように「非常に」と「多少」をあわせると47%であり、ほぼ半数の方が以前より労力を要したということになります。

図2 シラバスに授業の到達目標を記載するにあたり、労力を要したか

非常に	多少	これまでと変わらない	あまり	全く
8	36	40	7	3
(9%)	(38%)	(43%)	(7%)	(3%)

授業の到達目標を記載する以外の点で、シラバス作成にあたりこれまでに比べて時間を要したかどうかについては、図3に示すように、「非常に」と「多少」をあわせて31%であり、授業の到達目標を記載するのに比べて以前より労力を要した方が少なくはなっています。それでも全体的に見ると以前よりはシラバス作成に時間を要していることがうかがわれます。

図3 授業の到達目標を記載する以外の点で、シラバス作成にあたり
これまでに比べて時間を要したか

非常に	多少	これまでと変わらない	あまり	全く
6	22	56	4	2
(7%)	(24%)	(62%)	(4%)	(3%)

どのようなことに時間を要したかについて、主な回答をあげてみると、

- ・前年度の授業について、記録をまとめること
- ・前年度の学生についての理解度、成績にかんする検討
- ・他の関係科目の担当教員との情報交換
- ・次年度の学生の授業理解度の予測
- ・大学から使用指示のあるテキストを通読し、実際に教室でどのように使用するか検討するのに時間を要した

とあります。なお、その他の記述については本報告の最後にある資料（参考資料1）に全文を掲載していますので参照して下さい。

シラバス作成において成績評価方法の改善をしたか、すなわち、多元的成績評価などを取り入れてきたかということについては、図4に示すように、「はい」が46%、「いいえ」が54%であり、ほぼ半数ずつになっています。

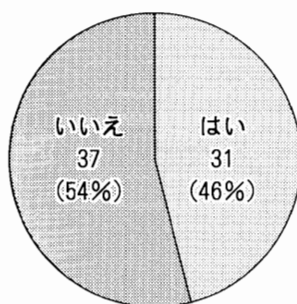
「はい」と答えた中での具体的な改善点についての主なものは以下のものです。

- ・出席、レポート、試験と総合的に評価
- ・判定基準の明確化
- ・試験の分割等

「いいえ」と答えた理由の主なものは以下のものです。

- ・すでに実施していたので
- ・昨年は多元的評価のためにレポートを課したが、負担が大きすぎると不評だったため、今年度は毎回ゼミの報告・討論と小課題だけにとどめた

図4 シラバス作成において成績評価方法の改善をしたか（多元的成績評価など）



作成したシラバスにもとづいて授業を実施した結果について回答していただいたところ、図5に示すように、シラバス通りに講義を進めたかについては、85%の方が「はい」と答えていました。その理由としては「書いたとおりに進めるよう努力した」というのが代表的な回答でした。また、「いいえ」の15%の方の理由として、

- ・受講者のレベルに合わせて、一部修正した
- ・1回の授業でこなさなければならない分量が多すぎて、やり残しがずい分出てしまった
- ・全く新しい授業方法をこころみたので

ということがあげられています。

図5 シラバス通りに講義を進めたか

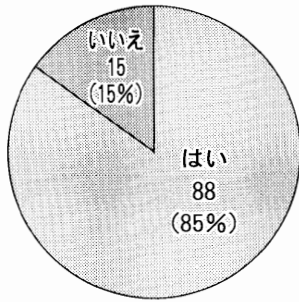
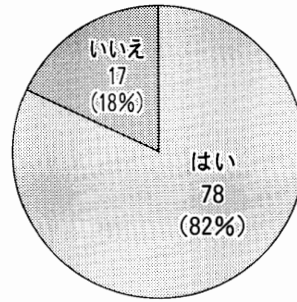


図6 授業の到達目標は達成できたか



授業の到達目標は達成できましたかという問いには、図6に示すように、82%の方が「はい」と回答しています。

その根拠として、以下のものをあげています。

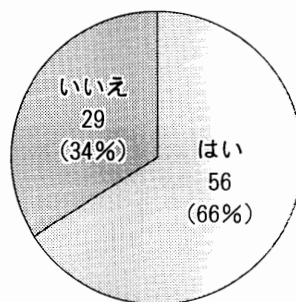
- ・試験やレポートの内容
- ・個人で実施した授業評価

いいえと回答した方では、以下のものをあげています。

- ・学生によってまちまちなので一概に言えない
- ・十分なものになったかは自信がない。ひとつの理由として、授業で取り上げた活動に参加してくれる学生が、今のところ極めて少ない

多元的成績評価を行ったかどうかについては、図7に示すように、3分の2の方が「はい」と回答しています。

図7 多元的成績評価を行ったか



「はい」と答えた方に、多面的評価が成績判定に良い効果をもたらしたかを聞いたところ、図8に示すように、「非常に」と「ある程度」をあわせると90%近くになり、多面的評価が成績判定に良い効果をもたらしていると判断されます。

また、全員に多面的成績評価についてどう思うかを聞いたところ、多様な回答がありました。いくつかを紹介すると以下のようなものです。

- ・必要であると感じる。受講生が多いと負担は重い
- ・学生の学習過程に対するフォローとセットで行うべき

- 学生個々の性質を大切にす視点が必要である
- 多面的成績評価をしなければ、合格率が低くなる。
- 初めて担当する講義では、事前に評価基準を作るのが必ずしも容易ではない
- スキルの向上、最終的な到達度について評価したい
- 学生の負担を考えて進める必要がある。すべての科目で多面的評価を行ったら、学生は追いつけない
- 理念として結構だが、現実にはむづかしい
- 多面的評価が勉学意欲向上を志向するタイプの学生に強い補強材料となることが確認できた
- 多面的成績評価の具体的な内容が分からない。

図8 多面的評価が成績判定に良い効果をもたらしたか

非常に 4 (8%)	ある程度 41 (80%)	あまり 6 (12%)
------------------	---------------------	-------------------

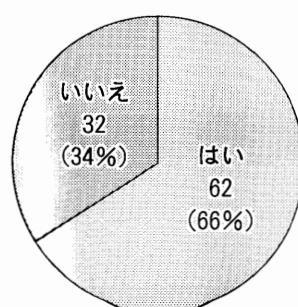
厳格な成績評価が実施できたかどうか聞いたところ、図9に示すように、3分の2の方が「はい」と回答しています。その理由として、以下のものがあります。

- 出席、レポート、ミニテスト、テスト、授業の感想コメントなど、全て検討して評価した
- 評価項目ごとの評価を点数化して合計した
- 結果的にだが、成績判定が適度にバラつきを示し、出席状況と成績との間に関連性も統計学的に確認したわけではないが認められた

また、「いいえ」と回答された方では、以下のように答えています。

- 教養ゼミは他の科目と評価の観点が大きく異なる
- 可以上の評価については厳格と思う。不可とするだけの学生との学問的接触がない
- 厳格にすると不可が多くなりすぎる

図9 厳格な成績評価が実施できたか



作成したシラバスについて満足しているかどうかについて聞いたところ、図10に示すように、「非常に」と「ある程度」をあわせて90%ほどになり、多くの方が満足しているという回答でした。「あまり満足していない」、「全く満足していない」という回答をされた方のコメントとして次のものがあげられます。

- 分担での担当だったので、事前に十分に担当者間での調整がなされていない。議論が必要である。
- 平常評価点、その他の複数の評価方法が本当の意味で多角的になかなかならず、実際の授業に円滑に生きなかった思いがある。学生の理解度を高めるための工夫を色々していると、手一杯となる時もあり、評価に結びつけるまでに至らなかった面もあることが反省点としてある。
- 夜間生の学生のレベルが低すぎる。改良策は思いつかない。

図10 シラバスに満足しているか

非常に 9 (9%)	ある程度 77 (79%)	あまり 9 (9%)	全く 2 (2%)
------------------	---------------------	------------------	-----------------

効果的な授業を進めるにあたって感じたこと、また、シラバス改良案など具体的なアイデアを聞いたところ、主なものとして以下のようにあげられます。

- 学生のニーズを察し、より効果的に取り入れていく
- 教育環境の整備
- 受講生が多すぎる
- テキストの分量が多い
- 学生の側の問題として、意欲のない学生への対策、シラバスに目を通していない、スタディスキルズを持たない学生への対応等

このように、アンケートについてまとめてみますと、昨年度のシラバス改善の研修会から、本年度の半期の授業を通して、シラバス改善の効果が少しずつでは見えてきていると感じられます。

4. 厳格な成績評価について

図1は、2004年度前期の全学共通科目の「Sの率、S-Aの率、不合格率」の平均値を示したものである（分母はいずれも履修登録者数ではなく、成績登録者数を取った）。平均値は、個別科目毎の値の平均値を取ることでもできるし、主題なら主題のすべての受講者の平均を取ることでもできるが、図1はすべての受講者の平均である。いうまでもなく、厳格な成績評価とは、不合格者を多く出すとい

うことではなく、シラバス等に明示した自らの成績判定基準に対して、それを厳格に実施したかどうかである。したがって、科目群毎にかなりの差があること自体は特別に問題とすることではない。

図1 2004年度前期全学共通科目（総数の平均）

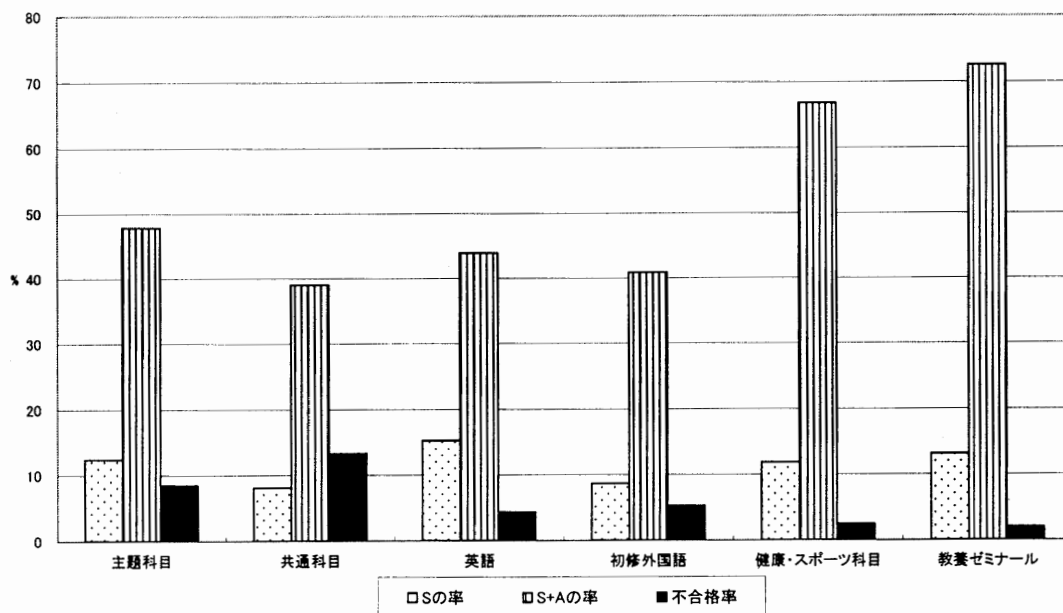
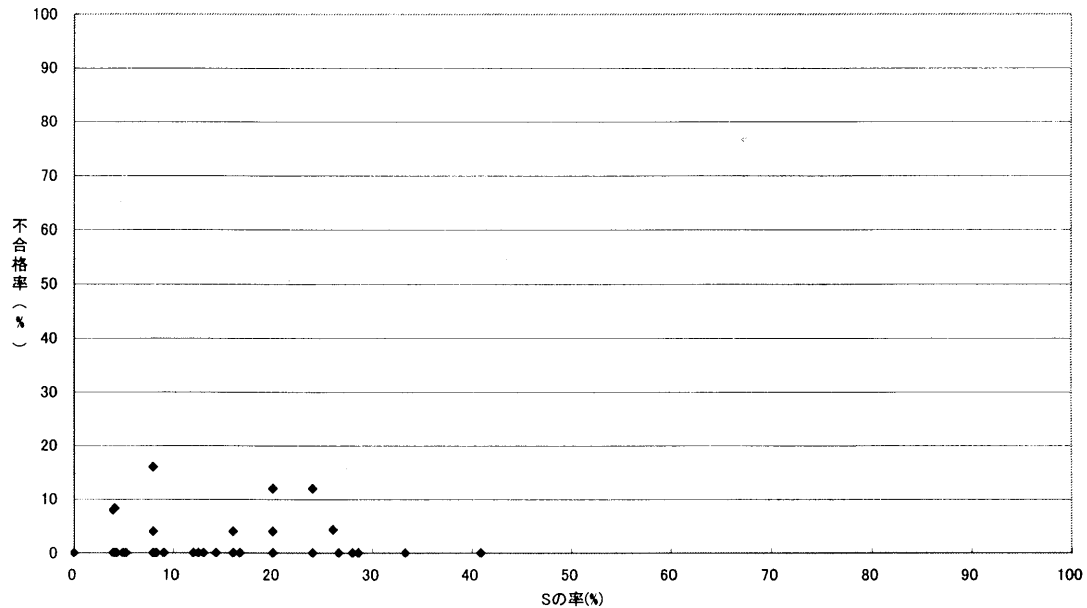


図2は、2004年度前期の教養ゼミの「Sの率と不合格率」の分布状況である。これをみると、かなりばらつきがあることがわかる。この問題は、絶対評価と相対評価という簡単には決着がつかない問題を含んでいる。即ち、教育のあり方は各教員に任されているという意味では、本来、相対評価で行われるべきものである。ところが、香川大学でも、法学部・経済学部・工学部でGPAが導入されている。GPAをうまく機能させるためには、とりわけSをどの程度出すかについては、ある程度の基準が必要になる。GPAはすべての科目で計算されるから、そこには学部開設科目だけでなく、全学共通科目も入ってくる。全学共通科目はすべての学部学生に開かれているから、自らの学部でGPAを導入していないとしても、全学共通科目を担当する以上は、この問題に無関係ではいられないのである。香川大学でもSやAの率について何らかの基準を設定しようという考えが提起されているのも、そういう理由からである。

図2 教養ゼミ (43科目)



香川大学では、教務委員会の下にワーキンググループが作られ、この問題も検討されている。ここでは、2003年度の（医学部も含めた）すべての学部と全学共通科目の成績評価のあり方が検討されている。なお、Sの率やS+Aの率、更に不合格率についてみると、学部間のばらつきなどは、かなり大きなものがある。香川大学の幸町地区では、学部間の授業の相互乗り入れが行われており、こうした学部間のばらつきが、相互乗り入れにも微妙な影響を与えている。今後とも、ワーキンググループで検討が続くものと思われるが、今回は紹介だけにさせていただくこととした。

5. ITを利用した授業改善の試み

5-1 大教センターにおける教育改良の試み：ITの応用

発表はパワーポイントを用いて行われ、ペンタブレット入力のデモンストレーションも含むものであった。

最初に研修会当日に話した概要を示す。

はじめに

シラバスの改良

教材の作成および改良

講義の進め方の改良

パワーポイントの活用

ホームページによる香川大学版

「教材の公表システム」の概念

シラバスの公開

教材の公開
掲示板の作成
資料作成のための支援システム
次年度へのフィードバック

まとめ

「はじめに」の部分では、今回のFDの目標の設定は何を参考に行われたか？について、中期目標をあげて説明した。その一部を抜粋した。

◎教材、学習指導方法等に関する研究開発及びFDに関する具体的な方策
①大学教育開発センター調査研究部において、学内の教員からなるプロジェクト・グループを作り、学習指導方法等に関する調査・研究を行い、学習指導方法の開発を行う。 (16年度計画) 大学教育開発センター調査研究部に学内研究員制を導入し、教育法研究プロジェクトを発足する。
②調査研究部を核として、教員の教育に関する指導・相談体制を構築する。 (16年度計画) 大学教育開発センターにおいて学内研究員制を発足させ、教育コンサルタント活動に着手する。
③教材や学生指導に関するFDを、授業視察や模擬授業と組み合わせた実践的な形式で行う。 (16年度計画) 大学教育開発センターにおける実践的FDについての調査研究の実施、ならびにテーマ限定型FDの試行的な実施

さらに当日の到達目標は、

パワーポイントを活用して教材を作成することができる。

ホームページによる教材の公表の方法を探る。

と設定した。

「シラバスの改良」の項では、昨年度来、行ってきたシラバスの充実と各セクションの記入上の注意点について述べた。

授業概要の部分では、概要を数行でまとめることを説明した。

授業の到達目標の部分では、学生が授業を受講することでどこまで知識、理解、技能等を高めることができるかを記載する必要性について述べた。

成績の多元的評価を行うについて、期末試験・小テスト・レポート等の評価方法の割合あるいは点数を記載すること、また、厳密な成績評価を行うことについて説明した。

授業の進め方、教材の使い方、視聴覚機器の使用等について記載し、また、予習・復習の必要およびその方法について記載するように説明した。

授業内容の実施スケジュール15回の回ごとに概略あるいはキーワードをつけて記載するような事な

などを説明した。

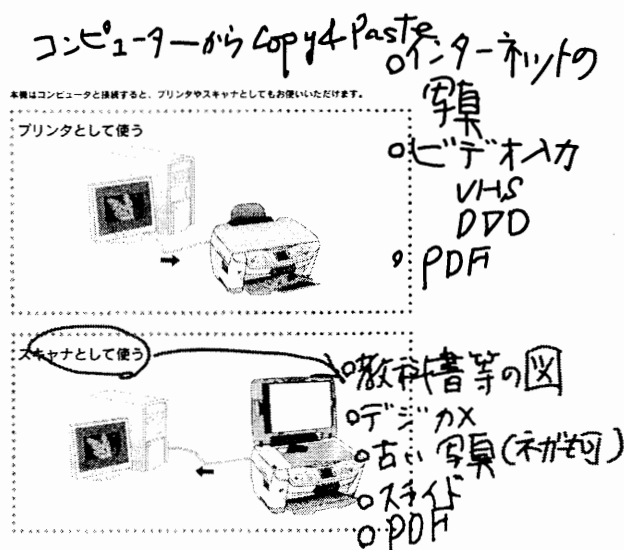
また昨年度のシラバス改革の理念が本年度に活かされ、さらに進歩した形で来年度に受け継がれることについて述べた。

次に「教材の作成および改良」の部分では「講義の進め方の改良」として、以下の各項目をあげて、説明した。

- 1 シラバスに従い、年次計画に基づいて講義する。
- 2 最初にタイトル、行動目標、キーワード、目次を示し、最後にその日の講義で達成できた所を示す。
- 3 視覚的、聴覚的にできる限り多くの学生が情報を取れる努力をする。
- 4 学生が質問しやすいように、必ず、各章が終わるたびに、質問をできる時間をとる。
- 5 その日の講義の達成率を自身で評価し、次の講義にフィードバックする。

次に「パワーポイントの活用」では、講義にパワーポイントを用いる上での長所と問題点を挙げた。問題点解決の一手段として、板書の必要性と、具体的なペン入力によるデモンストレーションを行った。その一部を示す。

パワーポイントの活用



さらに、講義で使っているビデオの供覧を行った。

次に「教材の公表システム」では、ホームページですすでに行っているシラバスの公開を説明した。また教材の公開については、現在、検討中であるが著作権の問題等をクリアする必要がある。また、掲示板の作成については、安井修二委員のほうから追加説明が行われた。

「教材作成のための支援システム」の項では、希望者を募り、2時間くらいの実習型の「パワーポイントによる教材作成」コースを開講することや、大学教育開発交流室（旧教養教育事務室）にコンピューターとスキャナーを設置し、予約制で利用できるようにすることを示した。

「まとめ」として

学生の質問などを参考に講義の進め方を改良する。

学生の授業評価を参考に講義の進め方を改良する。

各回の授業の進行状態を参考にして講義の進め方を改良する。

シラバスを書き直す。

講義資料をリニューアルする。

中期目標に従った香川大学における教育の改良の一端を示した。

シラバスの充実は重要である。

コンピューターを活用した教材の提示を積極的に導入する。学生に公表化をはかる。

これらの情報を元に次年度の講義の改良をはかる。

を説明した。

終了後のアンケートでは「ペン入力の実際」は有効な講義の手段となるとの評価を受けた。

5-2 Web上のシラバスの新しい試み

経済学部Webにも、当然経済学部のシラバスが掲載されているが、同時に、個々の先生のサイトにリンクが貼ってある科目もある。それをみると、授業の進行とともに書き直されていくものとなっている。名古屋大学では、こうしたシラバスを「ゴーイングシラバス」と呼んでいる。

実は、2003年度の全学共通科目のシラバスで、同じような試みを実施したことがある（大学教育開発センターのホームページには、過去のシラバスも掲載されているので、参照されたい。主題科目2「近代社会とは JE1」のHTML欄をクリックすれば立ち上がる）。これは、業者が作ってきたhtmlファイルの一部を書き換えて、個人的なページに飛べるようにしたものである（終了後は消していたが、今回のFDのためにもう一度読めるようにしておいた）。来年度のシラバスはWebで入力するが、Webのシラバスのなかに各自のホームページとか個人シラバスに飛べるようにする（リンクを貼る予定だ）と聞いているので、こうした試みが、今後は全学的に行えるようになると思われる。

そういう意味では、後は、「ゴーイングシラバス」のような試みを各自がやるかやらないかの決断だけである。しかし、やろうとすると、少し問題もある。

本年度の調査研究部では、中期目標・中期計画に書かれている「教育方法研究プロジェクト」についてさまざまな議論をしてきた。その一つが、上述のように、教材を豊富に盛り込んだパワーポイントのファイルを作るという試みである。しかし、それをWebに載せようとする、どうしても著作権の問題にひっかかってくる。そこで、アクセスに制限をかけることが必要になってくるであろう。また、学生との双方向の教育を実施するとなると、掲示板の作成も必要になるであろう。「ゴーイングシラバス」を実現するためにそうした体制作りをすることが、もう一つの課題として浮かび上がってきたのである。

そこで、2004年度後期の授業の進行にあわせて、アクセスに制限をつけたり、掲示板を作成したりしてみた（経済学部Webのシラバスのうち「現代資本主義論」を参照されたい）。アクセスに制限が必要とあるところには、学生の成績を入れてみた。過去に、学生の成績を名前も含めてWebに全面掲載して、新聞紙上で問題になったことがある。ところが、多様な成績評価を実施していて、一つ一つの小テストの度に聞きに来られても大変である。そういう場合に、アクセスに制限をかけてお

いて（パスワードを入れないと読めないとしておいて）、Webに載せるというのは便利である。もちろん、Webに載せるに際しては、受講生の了解を取っている。

このように、一応は実現しているが、これをテーマにして（中期目標・中期計画に沿った）講習会を開くということは、残念ながら難しいというのが現状である。理由は、掲示板を作成したり、パスワードが必要だとするというようなことをするためには、各学部のWeb管理者との緊密な連携が必要だからである。Webの管理は、学部毎に異なっているから、当然そのやり方は個別学部毎に異なっている。本格的にやろうとしたら合同作業が必要であり、大学教育開発センター単独ではできないからである。全学的な見地から、より大きな判断が待たれるところである。

掲示板ということでは、いまでは、ブログというのが大流行している。htmlのプログラムを知らなくても、いわばワープロ感覚で、掲示板のようなものが作成できることになっている。これは、学生との双方向のやりとりをする場合には、非常に好都合である。実は、経済学部の中村先生はこれを大学内でも利用できるようにならないものかと研究されていると聞いている。そういう意味でも、教育改革のより一層の進展のためには、情報処理の専門家との連携が不可欠なのである。

以上から、本年度に限っては、教材作成の講習会を中心にすべきであると考えている。

(参考資料1) シラバスアンケート自由記述

4-1 シラバスの作成にあたりどのようなことに時間を要しましたか。

- ・最初の経験なので多少のとまどいがあった。
- ・学生のレベルが分からず苦勞した。どの学部の学生にレベルをあわせるかということは大問題である。
- ・前年度の授業について、記録をまとめること。
- ・前年度の学生についての理解度、成績にかんする検討。
- ・他の関係科目の担当教官との情報交換など。また、次年度の学生の授業理解度の予測など。
- ・新たな内容の授業となったので、シラバス全部を書き改めた。
- ・教育の計画の再確認のため。
- ・教養を深め、豊かにするような内容の工夫。受講者のレベルをどのあたりと考えるか。受講者の必要とする内容の決定。
- ・講義開始前に全講義のシラバスの内容と合致するため計画を再確認したこと。
- ・指定統一教科書が導入され、そこでの到達目標、授業目的、性格、単位の認定法などが明示された為に、選択科目ではそれら指定科目との継続性、伸展性、整合性を考え、見極めなければならぬと思い、その面で慎重を期した。又、昨年はシラバス作成時の提出までに、例年より時間的余裕もなかった為、スケジュール的に忙しい気持を抱いた。
- ・授業科目を、4人の分担で行っているため、研修会参加の後、シラバスの内容を変更としても、代表に許可されなかった。そのため、シラバスと異なった内容で行わざるをえなかった。
- ・授業内容（教育項目）における取捨選択。
- ・シラバスの書きかえ（担当者の変更のため）。
- ・シラバスの書き方が統一されてきたので、それに合うように書きなおしたため。
- ・資料の作製。
- ・新規開講の科目ですから。
- ・前回（昨年）より詳細に書かなければ基準に達しなかった為、その作業で若干時間を多く要した。
- ・テーマにそった啓蒙書を読み、歴史を調べた。シラバスの文章に細心の注意を払って作成した。
- ・初めてだったのですべてに関して苦勞した。
- ・初めての科目であることと、他学部生にも伝わるようにするための配慮が必要だった。
- ・はじめての共通科目担当でもあり、どのように授業をすすめていくかについて考えた。
- ・初めて用いるテキストを使ったので、授業計画を練るのに時間がかかった。
- ・平成15年と平成16年度入学生の学力の相違があると推定された。学部間に理系科目に対する取り組みの差が大きいため平均的に教えることを考えた。
- ・全く新しい授業を組み立てるために、授業の構成を考えるのに、アイデアを要したため、時間がかかったと思う。
- ・より具体的に解りやすく表現する努力をした。
- ・留学生の語学力には毎年バラツキが多く、学生に合わせようとすればあらかじめどのような生

徒が来るのか知る必要があるが、それは無理。とすれば、学生にこちらに合わせよと要求するしかないのか、といつもジレンマに悩まされる。

- 授業の進め方について考える時間があった。
- 大学から使用指示のあるテキストを通読したり、実際に教室でどのように使用するか検討するのに時間を要した。自分で選べるテキストは、テキスト探し、取り寄せて通読等に時間を要した。

A 5-1 シラバス作成において評価方法の改善をされましたでしょうか。

【はい】

- 一昨年までは期末試験のみで評価していたが、今回はレポートと試験による評価を行った。
- 最終試験、中間試験、小テスト、レポート、出席点などにわけて行うことをさせていると理解している。私の担当分については、ワークショップ形式の参加型で実施しているので、そぐわないものと思う。
- 昨年度あまり理解を示さないことはなるべく省略した。
- 昨年まで手元にもっていた詳細な判定基準を学生に示せる範囲内で点数化して示した（なので評価方法としては昨年度と同じ）
- 試験の分割（中間試験と学期末試験の計2回実施）。
- 指定科目のシラバスで示された外国語教育の香川大学の方向性をつかんで、学期末試験での単一評価に片寄らず、平常評価の内容も複数の、しかも客観性、公平性が明示されるようにしたつもりだが、結果的にはシラバス上で完璧だったとは思えない。
- 授業に関連したテーマを与え、自主的な取り組み方やその結果得られた自分なりの意見を書かせるレポートを3回提出させ、また中間試験を設けて、論述を課せた。
- 授業の中で、対話と実習を通して、受講学生を一人ひとりより見ることができた。①授業中の発言・発想 ②レポート ③試験 を総合して評価した。
- 出席、発表評価、レポート評価の3点で評価した。
- 出席6割以上、宿題6割以上提出の学生を成績評価の対象とし、期末試験の内容によって不可～秀までの評価を行う評価方法を作成した。
- 出席することに重点をおいて、試験の結果と合わせて評価する（しかし出席すればいいというのではない）。
- 出席による評価、授業態度、技能などの割合を変更した。
- すでに実行してきたことなので、おおむね従来どおり。（夜間主）
- 多元的評価手法の検討。
- 定期試験ではなくて、2度にわたる試験を授業中に行なった。
- 定期テスト、小テスト（レポート含む）、出席の配分を明示し、それに従って行った。
- 評価項目毎の百分率を明示。
- 評価方法を明言化した。それまでは口頭で説明するだけだった。
- 明確なる評価点づけ。
- より多くの評価方法を用いるように努力した。

- ・より科学的に評価した。
- ・レポート（毎回・300字前後の内容）、出席点。
- ・レポート内容の書き方についてコメントを入れた。
- ・レポートを通し、スポーツに係る認識度の深まりを評価した。
- ・出席点、不参加出席、毎回の小テスト等。
- ・選ばれたテキストが良かった。

【いいえ】

- ・TAがどのていど利用できるかわからなかったので小テストを採り入れにくかった。
- ・助手にマークカードの採点をやってもらえるかどうか分からなかったので小テストを採り入れにくかった。マークカード（採点用）の値段が高い。
- ・1回だけの授業ですので、評価の判定は非常に難しいです。
- ・以前から多元的評価をしていたから。
- ・以前より、多元的な成績評価をしていたので。
- ・客観的評価が難しい。
- ・今年が初めて。
- ・これまでと変わりなく、授業態度、出席、GW内容、レポート内容、学生の評価など多面的評価を採り入れた。
- ・これまでも小レポートなど多元的成績評価を行ってきた。
- ・これまでも多元的成績評価をしてきたつもりなので。
- ・これまでも多元的成績評価をしてきたので。
- ・去年は多元的評価のためにレポートを課したが、負担が大きすぎると不評だったため、今年度は毎回ゼミの報告・討論と小課題だけにとどめた。
- ・残念ながら研修会には参加できておりません。多元的成績評価のイメージが正確につかめておりませんが、誤解を恐れず書きますと、教ゼミではワークショップで学生の授業参加を促したり、現場実習も条件になっていますので、そもそも多元的評価をしていると考えています。
- ・実験科目であるので、出席状況とレポートの成績評価となり、それほど変更する必要がない。
- ・従来から演習問題の回答状況、グループ別討論の代表者（毎回順番で交代）によるプレゼンテーション、レポートなどをベースにした多元的成績評価を実施してきたため。
- ・従来から多元的評価をおこなっていたため（レポート及び試験）。
- ・従来どおりで改善したとは言えないので。（期末試験の成績を主として、出欠等や小課題の提出を参考程度に活用して評価してきた）。
- ・従来通りの総合評価を継続した。
- ・従来通りの評価方法で十分に評価可能と思ったので。
- ・従来、種々の目標を設定した上で、成績評価していた。
- ・従来、多元的評価を行っている。授業の出席や取り組み、提出課題、試験成績を総合的に評価し単位認定を行っている。
- ・授業中でのレポート、質疑応答及び討論と授業終了後提出のレポートによる成績評価で従来と異なる。

- ・出席状況と授業中への討論への参加度という従来の評価基準でいいと思ったから。
- ・すでに「多元的成績評価」をある程度実施してきたと思う。
- ・既に複数の観点より評価を行っており妥当であろうと思われたため。
- ・多元的成績評価・・・よく分かりません。
- ・多元的といえ、すでに数年前から実行しているから。
- ・多人数で困難。
- ・到達目標を達成したか否かの判定方法（小テストの加算平均）をあらかじめ、受講生にシラバスを通じて通知していた。
- ・とくに必要と判断しなかったから。
- ・もともと実施していた。
- ・もともと前任校より実施していた（新任ですし）。
- ・研修会に出席していませんので、多元的成績評価を正確に理解できているとは思えませんので。ただ以前より成績評価におきましては、試験結果のみではなく、授業参加の有無、参加の仕方、程度などを評価の際の要素としては取り入れていました。

B 1－1 あなたはシラバス通りに講義を進めましたか。

【はい】

- ・2年目の授業であり、前年度の経験を踏まえて、授業内容や授業方法を改善しており、大きく変更する必要はなかった。
- ・4月頃は少しまごつきましたが、できるだけシラバスに沿うように進めました。
- ・概ね十分時間をかけて練った計画でもあり、それに沿った。
- ・同じ授業を何回も担当している。
- ・思う？意味不明。事実として、シラバス通りに進めた。
- ・各授業の主題を決定しておき、それを核として展開しているため。
- ・学生の理解に応じて進むことにしていたから。
- ・かなり詳細な計画を立てておいたから。
- ・計画通りであったから。
- ・講義をシラバス通りにおこなったので（シラバス作成時にそのような指示があったと思います）が…。
- ・答えようがない。
- ・これまでの経験で授業内容と時間配分を適度にできたこと。
- ・試験結果、学生の質問より。
- ・実験テーマを決定し、分担した授業（実験）をおこなっているのです。
- ・実施したいことを書き、それを実行したと思いますので、完全ではなくても、8割方はできたか？
- ・質問が不適切だと思いますが。
- ・若干早く終わらせたかった（台風や講師の健康などを考慮して）が、台風が6月21日に来て予定通りになった。

- 充分考えた上で、余裕をもった内容でシラバスの作成を行った。
- 授業開始時(?)に学生に授業の具体的計画についての表を配布したが、その通りに行われた(?)ので。
- 授業計画通りに進めたから
- 授業計画に沿った講義ノートを作成し、それに従って講義をすすめた。
- 授業を受ける学生は白紙であり、シラバス内容を熟読して授業に臨んでいることがわかったので、学生の期待に応えたいと思った。私の受け持つ外国語(英語)は世間的にも論議の絶えぬ状況なので、香川大学の明示した教育方針に学生と共に迷いなく邁進してみたいと思った。目的や方針、方向が明示されると教育は効果を生むと思うので、私個人がそれに添って努力してみたいと思った。
- シラバスからはずれないように工夫したため。
- シラバス記載の内容は授業で教えることができた。
- シラバス作成時に、時間配分を考え、少し余裕をもった内容のシラバスをつくった。(夜間主)
- シラバスで示した流れを学生に説明した上で授業を始め、また途中でもその点を確認しつつ授業を進めた。
- シラバス通りの進度を確認しながら、講義をおこなったため。
- シラバスに沿って講義を進めた。
- シラバスに基づき各講義の計画を再確認したので。
- シラバス作成時に想定していた指導項目を実施したので。
- シラバス自体に幅を持たせていたので。
- 設定した講義題目どおりであり、大体、時間内で消化できた。
- ゼミのお題をシラバスに記載し、その通りに行った。ゼミの方法(発表-報告添削)をシラバスに記載し、その通りに行った。
- そうしたのは事実、それがスムーズな進行だったから。
- その通りに行ったから。
- そのようにしようと意識していたため。
- そのようにシラバス作成。
- それが当然。
- だいたい、シラバスにそって授業を行っている。
- 多少の遅れは出たが、おおよそシラバスの通りに進めた。遅れが出た部分は、学生とのやりとりの中で時間が必要だと感じた部分である。
- 単位認定レポート始めに提示し、それに沿った講義を行った。
- テキスト1冊終えたから。
- テキストを完全に終えた点。
- 当該科目で理解させるべき最低限の内容を網羅するため。
- 当初予定した講義計画をほぼ変更することなく実施できたため(質問の意味があまりよくわかりません)
- 分担回数関係から変更できない。

- ・毎回、シラバスで事前に予告した内容の授業をした。
- ・毎回行っている。
- ・毎日、シラバス計画通りの講義資料を作成し、それを配付して講義を進めたため。
- ・まず授業計画をたて、それをシラバスに示し、そして授業を行っているため。
- ・予定通りの授業運営ができたので。
- ・教材の選択が良くシラバスの目的に合った授業ができた。事前の学習が周到に行われていて、教室では要領を得た質疑が多く、学生主導の授業であった。
- ・考えた上で作成したシラバスであるから。
- ・受講生がシラバスの内容を確認し、“めあて”をもって授業に取り組むことができているように思えたから。
- ・書いたとおりに進めました。
- ・書いた通りに行うよう努力しました。

【いいえ】

- ・予想以上に受講生が多かったため、思うほど内容がはかどらなかった。
- ・担当の授業は、基礎的な決まった知識を得るべきというものではなく、教養を深め、豊かにするという内容のもののため、授業後、毎回コメントを書いてもらった要望により、変更を加えたため。
- ・一部スケジュール、内容の変更を行った。
- ・概ねシラバス通りだが、完全にはいかない。受講する学生のレベルに合わざるを得ない。
- ・学生の進度等を見て調整し、最終回に予定していた授業は割愛した。教養ゼミは今回初めて担当のため、見積もり困難であったことが原因。
- ・学生の理解度に応じて変更した。実習中に子どもが怪我をしたこともあり、それを即授業に取り入れ問題設定をした関係で、柔軟に変更した。
- ・個人としては1回のみでした。
- ・研修後、内容の変更の必要性を強く感じたため
- ・最新の話題や教室の雰囲気かを考慮して学生の関心を惹くように講義を行っているから。
- ・砂上に楼閣は築けなかった。
- ・受講出来ていません
- ・その年その年で、生徒の能力に大きな違いがあり、生徒の能力に合わせて修正しながら進めるので。
- ・特別講義等があり、そちらを取り入れたりしたので。
- ・予定の2/3くらいしか進まなかった。学生の理解度が予想外に低かった。
- ・受講者のレベルに合わせて、一部修正したため。
- ・特に総合英語Ⅰについては、1回の授業でこなさなければならない分量が多すぎて、最終的にはやり残しがずい分出てしまった。
- ・全く新しい授業方法をこころみたので、シラバス通りには進めることができなかった。

B2-1 授業の到達目標は達成できたと思いますか。

【はい】

- ・「可」以上と判定した学生は、すべて、当方の用意した課題に取り組み、一定の成果を上げた
と判断できる
- ・8割方が報告書を提出し、添削を受け、5割方が（2～3度の再提出後）相当程度のレベルに
達したから。
- ・ある程度は到達できたが、改善すべき点も多い。
- ・ある程度できたと思います。
- ・ある程度まではできたのではないかと考えています。4月と7月に実施しましたテストで、ほ
とんどの学生の点数が上がっていましたので。
- ・主にワークショップ形式で行ったので、研修で得た論点には十分応えていると思う。
- ・各人のレポートをみて。「喫煙と呼吸器疾患」なのでタバコの害について理解したようです。
- ・学生に学びの楽しさを引き出すことができたから。
- ・学生の学習意欲、態度等によくみられる。又、学生との対話でも、学生の評価もよいことを知っ
ている。
- ・学生の積極的な授業への参加、これまでもっていた知識（先入観と言えるかも）をゆさぶる、
の大きな二つの目標で、学生の頑張りが見られた（レポート提出も含む）。
- ・学生の反応や小課題の出来具合を見てとしか答えようがない
- ・学生の理解度から
- ・課題、レポートを増やし、授業以外での時間を増やすなど工夫をしたため。受講者からそのよ
うな反応が得られたため。
- ・過半の学生に学問への興味を喚起できたと思う。
- ・教科書内容において講義の対象とした部分はほぼ達成したから。
- ・憲法が果たす国内的側面と国際的側面のそれぞれ固有な点と相互関係（影響関係）の理解を深
めえたこと。
- ・考察力、プレゼンテーション力の養成が目的なので、最終回の内容の割愛は影響しない。
- ・後半に行くほどプレゼンテーションがうまくなったため
- ・個人で行った授業評価でも学生がある程度、授業内容に満足しており、与えた課題を適切に行っ
た学生の理解度が高かったため。
- ・最後の学生のレポートから判断した。十分に目標には到達できていた。
- ・最終講義の際、学生アンケートを行った。（100%信用できるとは思わないが）好感であった。
- ・試験での論述内容から。
- ・試験の結果はおおむね良好であったから
- ・実験の目的と、そこで取得すべき項目が設定され、その点について実験、実習をおこなってい
るので。
- ・質問が不適切だと思いますが
- ・授業計画をすべてこなしたし、到達目標を考慮した。期末試験でよい成績を取った学生が多かっ
たので。

- ・授業中に実施した課題の内容・水準、試験の答案内容を評価し、改善の余地はあるものの、到達目標はほぼ達成できたと考えます。
- ・受講生の最終レポートを読み、かなり達成できたと判断。
- ・受講生の試験成績。
- ・生徒からの感想など。
- ・全員が課題発表とレポート提出をクリアーした。
- ・全員ではないが、積極的に参加した学生は達成できていた。
- ・そのように努めており、学生のレポート等からそう思われた。
- ・だいたいできたと思います。個人の受けとり方で違いますが（個人のmotivationにより開きが出てきます）。
- ・単位認定レポート始めに提示し、それに沿った講義を行った。
- ・テキストを完全に終え、学習方法を伝えることができたから。
- ・テスト結果から判断
- ・到達目標は具体的な成果として表れるものにしたため。
- ・トレーニングの成果が後半に見えたため。
- ・ひととおり、やる予定の事がすべてできた。
- ・別に問題なかった。
- ・目標に添って努力しましたので、7、8割方はできたかと思うので。
- ・予想以上の学習の習熟が見られたため。
- ・レポート、試験内容も普通によかったと思う。
- ・レポートの内容の変化をみて。
- ・レポートを課した結果。
- ・学生が熱心である。
- ・学生の関心が強く、目標にそった授業ができた。継続学習の効果が顕著に現れていた。
- ・学生の宿題と授業中の返答及びテストの結果を見てそう思います。
- ・欠席回数が3回以内（以上？）の受講生は少なく、皆勤の学生が大多数でした。全員合格できました。
- ・講義時における学生の応答力のヴァリエーションと正確さの向上を実感したので。
- ・人間関係を密にし、多数の受講生にゲームを楽しむ様子が確認できたから。
- ・全体的には達成できた。学生の思考・知識を刺激する点で特に。

【いいえ】

- ・全ての人が、同じ程度到達するのは、不可能と思います（能力ではない）。
- ・ある範囲の人を対象とした講義では、全員に対して目標を達成するには無理があると思います。
- ・1回の講義のため？全く理解させることは困難です。
- ・学生の方の意識の変化が予測できなかった（多くの学生は大学での学習に意欲や目標を失っていると思われる）。
- ・学生の理解が不十分。

- ・学生のレベルが多様で、どこに合わせるのかむづかしい。低いレベルに合わせれば目標は達成できたと思う。
- ・教育受容者が一律同じパーソナリティ、実力、動機付け、でいるわけではないので、到達度の結果は、多様なものにならざるを得ない。又、高校卒業時までの教育内容、進度が様々であり、授業ではその点を配慮しながら、進めていかざるを得ぬ面があったから。
- ・十分なものになったかは自信がない。ひとつの理由として、授業終了後に活動（ボランティア活動 子どもの遊び場）に参加してくれる学生が、今のところ極めて少ないため。
- ・授業の到達目標を設定すること自体が困難、により。
- ・対象が1年生で、しかも医学部以外から聴講している学生もいたため、説明が不十分だったと思う。
- ・担当したのは教養ゼミだったが、最後に授業まとめとして期末試験（ただし内容は授業を受けた感想記述が主）を行った。その解答を見て、受講者全員が目標に到達したとはいえないと判断した。
- ・予想以上に、自学が足りない学生が多かった。
- ・より具体的な到達目標にするべきであったと思う。
- ・科目の性質上、このコマ単独では達成できない目標なので。
- ・学生間に到達意思についてバラツキがあったから。
- ・特に総合英語Ⅰについては、1回の授業でこなさなければならない分量が多すぎて、最終的にはやり残しがい分出てしまった。
- ・学生の積極的参加の点で（学生の性格によるものか）不十分。
- ・学生により差がある（レポートの内容から判断）。
- ・学生の成績によって到達した者、そうでなかった者がいるので。
- ・ずい分時間をかけて丁寧に説明もし、練習もしたが、学生の意欲をかりたてることはできなかった。（夜間主）

B3-2 多元的成績評価について、どう思われますか。

- ・「多元的」が教師から学生への一方的な「押しつけ」にならず、学生個々の性質を大切にすると視点が必要であると思う。
- ・多元的成績評価はうまく使わないと学生のやる気をなくすことがある。
- ・小テストは時間をとるので授業時間にくみこむことがむづかしい。
- ・レポートはカンニングで判定がむづかしいので成績評価に積極的には取り入れにくい。
- ・今までも同様に行っていたので特に今回変わったことはなかったが、秀の判定が難しくなった。
- ・外国語学習は多元的にしか、その評価がはかれないものである。
- ・学生の負担を考えつつすすめる必要がある。仮にすべての科目で文字通り多元的評価をまじめにやったら、とても学生は追いつけない。
- ・学生はいやがっていたように思われます。例えば、外国語を四機能で判断されることは、わざわざ、勉学の内容を増すことになるので嫌っているように思われる。（夜間主）
- ・学生を様々な側面から評価する作業は重要。ただし、レポートの内容と試験の内容とはだいた

いレベルが一致しており、その意味で、多元的評価は学生の学習過程に対するフォローとセットでなければ意味がないのではないかと感じる（大講義ではそれは難しいが）。

- 科目の内容によって当然に考えるべきことであり、これまでも、これからも、必要に応じて実施します。
- 教養ゼミでは必要であるが、主題科目、共通科目では不必要であるとする。
- 教養ゼミは輪読方式で、読解力とディスカッションする力が問題となるが、さらにレポートを課して文章力も見た。学生の能力は多様で、多元的評価でないとそれは把握できないし、教養ゼミのような授業では必要であると思う。
- 形成的評価を視野に入れて積極的に取り組んでいきたい。
- 研修会に参加していないので、その評価方法がよくわかりませんので、B3の項目には答えられません。
- 研修会に出ていないので分からない。
- 効果があったかどうかは不明。
- 習得度の高い、習熟度の高い学生は、自分で他に勉強を進めていっている様子だったが、単位の為に多元的評価面も気にせずにはいられず、多元的がイコール公平的、平等的とはならない面もあると感じた面もある。多元的評価は評価する側が公平性、客観性、機会均等性に絶えず心を配って自己を律していかなければならないので、その辺の腐心と最終評価に達するまでの複雑さへの粘り強い取り組みが必要だった。多元的評価は勉学意欲向上を志向するタイプの学生には強い補強材料となることを確認できた。
- 重要な客観性や応用力などを評価するのは非常に難しいと思いますので、講義の成績はあくまで1つの目安としか考えていません。
- 従来から出席とレポートであり、多元的成績評価であった。
- 授業の専門分野においては多元的成績評価になじまない（というより困難な）ものがある。
- 受講生の取り組み意欲をアップするのに重要である。
- 出席、宿題提出については、6割以上を成績評価の対象とした。単位を取得学生の9割以上は出席率、提出率共に9割以上であり、出席率、提出率は期末試験を受験する際の最低要件と位置付けたこの試みは、多元的成績評価の1つになるのではと思います。
- 出席状況、レポート内容（授業毎のレポート）により、どの程度理解し、授業参加態度、自分の考えを述べているか、評価できた。
- スキルの向上、最終的な到達度について評価したい。1回の期末テストでは判断しないという点では良かったが、この学生はもうすこしやればできるだろうという観点では評価したくない。多元的評価をまちがわないように努力したい。
- すべきことと思っています。
- 成績の処理方法を変更するのは多少労力を要したが、合理的かつ効果的であるため結果的には良かった。
- 設問A5に対応しますが、私の理解に誤りがなければ、効果があった、というより効果が出るよう授業工夫をしていたということになります。
- 多元的成績評価について十分理解していないので、答えられません

- 多元的成績評価については、その効果は何とも言えない。どの科学でもいろいろなものを評価のために学生から提出させたりすると、学生に過重負担となるのでは。
- 多元的成績評価は評価する教員によって基準が異なるので、多元的成績評価を浸透させることと、学生の成績評価を点数化して優劣をつけることは方式として相いれないと思う。
- 多元的成績評価をしなければ、次のB4と関係するが、合格率が低くなる。
- 多元的評価の意味内容がもうひとつ不明である。
- 多数の学生を教える場合、自学自習の評価、授業での評価等は下すのが困難となる。多元的成績評価は少人数クラスにして初めて可能となるのではなからうか。
- 地球上の変化、環境の変化、社会の変化につなげて、自分の人生設計をcreateする感性を基盤にするから。
- 初めて担当する講義では、事前に評価基準を作るのが必ずしも容易ではない。質問回数を評価すると明言しているにもかかわらず、学生が質問しない。
- 必要であると感じる。ただし、受講生が多いと負担はとても重い。
- 評価の前に、授業の進め方、内容に重点を置くべきと考えます。最初関心のない学生でも、大きく変わることが嬉しかった。
- 複数の指標によって評価する方が、各人の到達度を測りながら授業を進められるので好ましいと思う。
- 報告、議論、報告書→添削を総合的に評価した。但、手間がかかる割に旨く行ったかは自信なし。
- 毎回、授業後10分程で記入できる量のレポート（感想、考え）を提出させているが、それを全て読み、評価するとかなりの時間を要する。負担になる。
- むつかしい。
- よく分からない。
- 理念として結構だが、現実にはむつかしい。夜間主クラスを担当する場合、彼らにレポートを課すのは無理である。図書館を利用できる時間には大学にいないからだ。
- 学生の個性（長所）が評価できるから。
- 学生は単位の認定方法に敏感である。宿題および自学課題の結果に関しては、主に副教材の記録帳を中心に評価した。
- 研修会に出ていないので、多元的成績評価とは、を存じませんので。
- 多元的成績評価の具体的な内容は知らなかった。
- 多元的成績評価は良いと思われれます。

B4-1 今回の授業で厳格な成績評価が実施できたでしょうか。

【はい】

- 「厳格な成績評価」の「厳格な」とはどういう意味なのでしょう。それをなるべく「客観的な」という意味にとればそうだと思います。「厳格な」は少人数しかパスできないともれませんが。
- 出席状況、レポート内容（授業毎のレポート）により、どの程度理解し、授業参加態度、自分

の考えを述べているか、評価できた。

- 各学生の自主努力に応じて点数を配分したつけ方をしたから。
- 学生に事前に、出席点、レポート点、発表点、発言を点数化することを配点を明示し、それに従って採点を行った。
- 学生の満足度がうかがえる。
- 各評価項目に採点基準を設け、その評点を積み上げて（満点を100に換算）、大学の評価の目安に従ってSからXまでに割り振った。
- 基準に照らして総合的に厳格な評価をしたつもりなので。
- きちんと採点しました。
- 結果的にだが、成績判定が適度にバラつきを示し、出席状況と成績との間に関連性も統計学的に確認したわけではないが認められたため。
- 厳格という意味が分からないが、これまでどおりの基準で、適正に評価したつもりである。
- 厳格な成績評価をしたつもりだが、評定が偏ったため、他の教員の評定平均と兄並みを揃える必要はあるかと思う。
- 厳格なテストを行ったので。
- 厳格に行った。
- 講義に出席してただけでは不可で、必要なレポートを必要枚数以上提出して可以上とした。
- 試験においては「正解」のある問題を多数個出題した。レポートに関しては具体的な回答を求める課題を課したから。
- 試験問題は正誤のハッキリした厳格なものだったし、得点分布も一様だったので、秀や優も多いが不可も多いものになった。厳格な成績評価のできない教員は試験問題から練り直したほうがいい。
- 事実としてYesです。
- 実施したので。
- 秀・優・良・可と4段階に成績をつけ、差別化を図った。
- 授業へのとりくみ方、出席率、レポートの内容を総合的に客観的に評価できたので。
- 出席、提出物、試験それぞれに点数の配当を行い、それ（ガイドライン）に従って点数をつけ、達した学生のみ単位認定を行ったから。
- 出席、レポート、ミニテスト、テスト、授業の感想コメントなど、全て検討して評価したから。
- 出席状況、発表内容、授業中での発言、期末試験を、総合評価して、S、A、B、Cの評価をつけた。
- 出席とレポート中心の評価であり、レポートは毎日細かく採点していたため、完全な数値化が可能であるため。
- 出席とレポートによって、学生がおこなった内容の吟味が出来るから。
- シラバスを遵守した。別教本の指導も十分に行い、全般的な評価が可能になった。
- 数値化して成績を決めた。
- すべての条件を考慮して対応できたので。
- 設問が不適切です。

- ・総合的評価とはいいいながら、個々の活動を丁寧に評価し、その結果を総合して評価するように努めた。例えば、個々の提出物についても、その内容を評価した。
- ・多岐にわたる複数回の評価を採り入れ、自学自習（家庭）課題の点検も実施した。15回の授業のみならず、その他の勉学面にも教師として接し、教師、学生双方に納得のいく評価を実施するために、多大な時間と労力を要した。結果は双方の満足のいくものとなったが、厳格であるためには、評価者も努力できたという思いがあるので。
- ・テスト結果通り判定。
- ・テストで詳細な記載順に成績評価を行ったから。
- ・手間をかければ、それだけの答が得られる。
- ・筆記試験としての成績評価に限定している。
- ・評価項目ごとの評価を点数化して合計した。
- ・ほとんど皆勤の受講生が大多数を占めた。全員及第できた。
- ・目標の設定とその到達度をもとにしたため、例えば判定後に学生に問い合わせられたとしても100%（とはいかないかも…）に近い確率で、具体的に説明できる。
- ・問題に対する解答内容のポイントが明確であったこと。
- ・レポート、試験共にまじめな出来であった。
- ・論文式の試験を中心に評価をしたが、どうもそれ以上にやりようがない。
- ・私自身の中では厳格な成績評価を実施したが、他の教員の評価方式と同じではないだろう。
- ・期末テストのみならず、平常点も評価できたこと。
- ・教科書についている試験問題のレベルにもとづいてテスト問題をだしたから。
- ・出席状況のみならず、講義中の態度など考慮に入れたので。特に例年通りではありますが、出席に関しては厳しくチェックし、評価要素として重きをおきましたので。
- ・人数が少ないので、実力にあった評価ができたと思います。
- ・中間テスト、期末テスト、平常点、提出物の4点に基づき、私なりにきちんと評価したつもりです。少なくともクラス全員がAとかB・・・などといった（私が大学生だったころにはよくありがちだった）方法は用いませんでした。

【いいえ】

- ・「厳格な成績評価」をどのように解釈するかという問題がある。期末試験の成績による達成度で考えるとあまい評価ということになる。授業への出席、レポートの提出を含めると厳格な評価となる。
- ・「厳格」が学生を萎縮させはしまいかと怖れたから。
- ・1回についての授業評価は難しいです。
- ・可以上の評価については厳格と思う。不可とするだけの学生との学問的接触がない（ゼミなのに、10名以内なら可能だろう）。
- ・学生が多学部にわたり、学年も1年生から5年生と多岐にわたっていた。個人的指導もした。全体として受講生が授業内容をある程度、理解できるようにした。
- ・学生の質問回数が少なく、最初に予定していた評価基準では不合格者が多数になるため、基準を緩めざるを得なかった。

- 客観的評価が難しいため。
- 教養科目では厳格な不可の評価がためられたので。
- 教養ゼミナールは慣例で優とすると聞いていたから。又、厳格な成績評価が可能な数学のような課目と性質が異なるから。
- 教養ゼミは他の科目と評価の観点が大きく異なる。
- 欠席、遅刻者（授業開始後、30分以上、あるいは終了時刻の頃出席する物etc.）も、レポートを提出している。同じ筆跡、同じ内容の者もあり、明らかに不正行為がある。工夫を要する。
- 厳格という表現の意味がよく理解（？）できない点と、多人数の学生の評価を厳格に行うことはむづかしいと考える為。
- 厳格な評価は可能であったが、その判断が個人に任されている以上、過半数以上の学生を不可にすることができないため。
- 厳格にすると不可が多くなりすぎる。
- 厳格に成績評価すると、ほとんど不可になってしまう。
- 少人数、全員出席のため、差を見つけにくかった。
- 第1回から出席者のリストが決定していないと全体の評価はできないでしょう。
- 中間試験も含めて、数回の試験結果で成績判定を行ったが、クラスの平均が40%程度で、これでは多数の不可を出してしまうので。（夜間主）
- 定期試験をしてないから。能力よりもむしろとりくみの意欲や努力を重視しているから。
- 到達目標はあまり高く設定していないため、優の数は多くなったから。
- 必修科目である以上、或る程度は通す必要がある。目標や負荷を高くはしているが、それは全体的なレベルを保持するためで、全員が必ず到達できるレベルを目標としない以上、不可の認定については緩やかに考えている。
- 評価そのものが困難。
- レポートの内容と出席回数で評価したので厳格とはいえない。
- ワークショップ形式のため、○×式、論述式で採点できない。むしろ、ここで得た経験を通して、今後の専門への取り組みや、将来、モデレーターをめざすことの難かしさと、意義を見つめてほしかったので、十分に当初の目的を果たした。
- ワークショップの関与の仕方を評価するには一連の制約がある。実習もしかりである。文章での評価と活動での評価をどう総合的に判定するか課題が残っています。
- 今少し、客観的なデータに欠けるため。
- 質問の意図がよくわかりません。厳格とは何を意味しているのでしょうか（きびしさの程度？ 明確さの度合い？）

C1-1 作成したシラバスには満足していますか

【あまり、全く】

- シラバスで伝えられることの限界にあると思われる
- すべての学生が目標を達成できた訳ではないので、今後細部にわたる検討が必要であると考え

- 内容には満足しているが、枠に記入するフォーマットのためひじょうに醜いシラバスになっている。刑務所の独房のようなワクは止めてもらいたい。
- 初めての授業であった為試行的な要素が多く、改善の余地のある為、改善点は押えるべきポイントをさらに明確にし、表現方法に内容を明確にするなどの工夫を加える。
- 分担での担当だったので、事前に十分に担当者間での調整がなされていない。議論が必要である。
- 平常評価点、その他の複数の評価方法が本当の意味で多元的になかなかならず、実際の授業に円滑に生きなかった思いがある。学生の理解度を高めるための工夫を色々していると、手一杯となる時もあり、評価に結びつけるまでに至らなかった面もあることが反省点としてある。
- 全く新しい方法をためしたので、授業とシラバスにギャップが生じた。
- 夜間主の学生のレベルが低すぎる。改良策は思いつかない。
- 授業の形態がやや特殊で、参加者が集まった後に具体的なことを決定せざるを得ない。そのためシラバスにはあまり具体的なことが書けないから。
- 到達目標を具体的に到達可能なものにする。
- 学生の質を知ることが必要。
- 教師としての情熱を伝えたい。
- 講義用スライドに不備（字が小さすぎて読めない）。

C 2 効果的な授業を進めるにあたって感じたこと、また、シラバス改良案など具体的なアイデアがありましたらご記入下さい。

- 「楽しく、楽に単位が取れる」と前年度の学生が新歓行事で話したために学部が偏ってしまった。シラバスのみだと教育学部の学生が集まるが、別の要素が入ると授業に若干支障をきたすこともあると感じさせられた。評判が良いのは嬉しいが、もっと活発な学生に受講してもらいたいというのも正直なところだ。
- 「総合英語」のように大学がテキストを指定するのであれば、進度・授業方法についてまで統一するのか否か、の議論を深める必要があると思う。
- 研修会は無内容 ただの顔合わせ。
- 講義室で使用しない古い装置などは取りはずしても良いのではないか。
- エアコンなど、電気のムダ使いが多いように思います。
- シラバスは冊子体でなくても良い（必要な科目のみ選べれば良いのでは・・・）。
- 本点（転記者注：解読不能）でするには手間暇をおしむわけにはゆかない。
- アメリカ式のシラバスでなければ意味なし。
- A4縦に横書きとフォントのポイント数目安という指定だけで十分。枠はなくして欲しい。すべてタイプライターで打ち込めるようなフォーマットが正しいのであり、香川大学のものはデザインが誤り。誤りをおしつけないでもらいたい。
- JABEE がすべて「善」とは考えないが、学生との契約の一種と位置づけたシラバスの作成方法や、厳正な評価基準の策定を義務づけた点など、その理念や具体的方法論は参考になるものが多く、その延長線で対応できたため、今回の教ゼミの担当も、円滑にすることができたと考

える。

- Listening に予想以上の時間を費やした。Reading に関しても発音面の指導も必要である。授業時間の調整が今後の課題になっている。
- 今年度より、英語（一般教材）は一部統一テキスト方式になり、私は、異文化コミュニケーションと総合英語を担当しました。統一テキスト方式自体には賛成なのですが、総合英語については、学期中にこなさなくてはならない分量（教材の量）があまりにも多かったと思います。理想はわかりますが、「過ぎたるは及ばざるがごとし」です。
- 意欲のない学生対策。昨年度と同じ傾向——意欲のない学生が多い順 A学部・B学部（全員良か可か不可）>C学部>D学部・E学部（秀・優の比率多い）（F学部学生の受講なし）。
- イラク戦争など激動する世界状況をみすえつつ授業を進めたので、シラバスの一部分は軽く流したこと。
- 外国語科目の必修化を廃止し、他の科目との間で選択可能なものとする。意欲のある学生には、さらに授業を準備することが望まれる。（夜間主）
- 学生が主体的に考え、発表する環境が必要だと思います。
- 学生のニーズをもう少し反映してはと思う。そのため科目部会教員がアンケートをとり集計している。その結果を熟考すれば具体的な方向性が示唆されると思う。
- 学生の反応に合わせて進度を調整するので、何回目に何という記載は無意味。学期全体でなら、書けるが。
- 教育環境の整備（適正な受講生数、教室の大きさ、固定机ではなく移動可のものなど）にも配慮いただきたい。大規模授業の解消、同一時間帯複数開講。
- 教室のサイズが大きすぎたこと、ゼミをやる机（固定机のため）の配置等、状況がつかれなかった。
- 教ゼミは一クラス15人（現25人）にしてほしい。
- 教養ゼミを担当したが、受講生が多すぎて十分な討論が出来なかった。数大でも15名以内とすべきではないか。
- 今回はあまり問題は発生しませんでした。はじめて担当する講義では、シラバスを詳細に書きすぎると、後で異なる点がでてきます。できれば、学生には、そのような情報を提供できるとよいと思うのですが。例えば、「シラバスの内容は若干変更する可能性がある」などの記述を（必要な場合は）認める、などです。
- 辞書サイズのハンドブック化が望ましい。
- 授業担当の教員と研究担当の教員を分けて、各々授業・研究に専念させることが望ましい。中途半端になってしまう例が多い様に思う。
- 授業とは学生のニーズをさっし、それをより効果的に取り入れていくこと、その上学生との対話をかかさないうこと、学生の学習意欲を常に向上させること等。
- 授業の準備のための資料は何回も何回も推敲する必要がある。
- 使用可能な教室、機材をあらかじめ示し、選択させてもらいたい。
- シラバス改良案よりも、学生がシラバスに目を通していない方が問題ではないか。シラバス作りの労力は？シラバス作りは体面を整えるだけ？

- シラバスに書かれたとおりに進めない方が、受講生の実情にあったよい授業ができることがわかった。このようなアンケートをしない方が自分の信念にもとづいたよい教育ができる。
- シラバスに書かれた目標や評価基準が絶対的なものであると学生にもっと浸透すべき。
- シラバスを作成するには多大な費用がかかるので、1年次のみ配布し、あとはインターネットで見ると、図書館や共通閲覧室などに複数冊設置すれば良い。授業の手ごたえに関してはよかったと思っているが、その分エネルギーを使わないといけないため、大変である。シラバスを充実すると文部科学省などの評価を受ける時はいいかもしれないが、特に上の方の学年の学生はあまり読んでいないため徒労だと感じる。
- スタディスキルズを持たない学生は、低年次にそうしたスキルを修得する場所がなく、それがそのまま評価の低さにつながっている感じがする。大講義では、オフィスアワーに来室したひとにぎりの学生に対してしかフォローが出来ず、最初の2～3時間をこれに費やすことから始めなければならないのが現状。シラバス改革と平行して、学生のこうした現状に対しても何らかの方策をとるべきだろう。
- 大学にお金がないのに、あのりっぱな冊子は無駄である。インターネットの活用を期待したい。
- 多人数の授業はレポートの整理・評価、期末試験の評価などで負担が大きい。主題科目については授業開発経費（仮称）の配分が求められる。TAが途中から配置されたが、年度初めから配置できるようにすると担当者の負担を軽減することができる。
- 特になし。
- 標本提示が効果大であった。
- 複数の教官の場合、個々のシラバスを載せてはどうでしょう。
- 毎回学生の授業評価を行ってほしい。その結果から、自分の授業の欠点を直すきっかけとなる。又、その結果を何らかの形で教員評価に使用することが授業をよくすることと考える。
- 毎回出席票を配り、その日の授業内容、質問を記入させて提出させた。これにより高い出席率の維持と授業内容のフィードバックが可能となった。
- ミニレポートをもっと増やして、授業中に取入れる工夫が出来たかも。シラバスはもっと詳しくすべきかも。
- ワークショップのための資材の購入に必要な予算を頂けなかったようだ。
- 私の担当科目は科学技術に関するものであり、3回に1回は実演を行っており、学生の関心や理解を高めるよう努めております。いくらシラバスを良くしたところで見かけ倒しでは評判を失いかねないでしょう。
- 非常に人数が少なく、また参加／不参加が安定しない場合、あまり連続的な内容にしない、などの配慮が必要だった。
- 副教材は時事的なものを扱ったり、インターネットを使ったり工夫した。シラバスはフレキシブルな部分を残しておく必要があると感じた。余裕も大切である。

(参考資料2) 全学共通教育研修会アンケート

A. 本研修会を受けて、お感じになったところ、参考になったところなどありましたら、下の欄にご自由にお書き下さい。

- ・限られた時間内に、たいへん内容のつまった研修会であったと思う。
- ・全てが、初めてでした。今まで不明だった点がわかりました。ありがとうございます。
- ・竹内センター長のお話になった「国際基督教大学の取り組み」が印象深く、参考になりました。また、IT活用の具体例についての話が参考になりました。まだ理解できないところが多いので、ワークショップ等に参加したいと思います。
- ・ICUの例が紹介されていたが、この重要性については、一般的に共有されていると思われる。問題は、この理念を実現するために、具体的にいかにして講義をすればよいのかについて、FDや模擬授業等を行う必要があるのではないのでしょうか。特に実際にコウギ参観をして、これに基づきギロンすることが、これから、重要と思われる。
- ・厳格な単位認定についての理解を深めていただきたい。
- ・主題科目の変更予定の状況が分かった。シラバスの実行、評価については、興味が大変あった。
- ・第2部でのお話（ノウハウ）が参考になりました。
- ・Webでの導入がもう少し分かりにくい（必要性があるのか？）大学の目標が教育にあるのであれば、もっともっと充実させるべきである。
- ・シラバスアンケートの報告の意図がみえない。例えば、資料は事前に配布しておき、教員の声にくたえる機会とするなどしてもらいたかった。IT応用の話題はためになった。画面が見にくくてシラバス登録は、はじめて聞いたのでは分らないと思う。
- ・パワーポイント教材の具体例を見ることができた。特にペン入力により短所をカバーするアイデアは、パワーポイントを使用しない場合でも参考になった。
- ・パワーポイントの問題と対策について各先生がとりくまれている点
- ・ベテランの先生方も意欲的に取り組まれていることを知ることで、頼もしく思いました。研修をやっていただくのは有難いのですが、現在使っている人向けのさらに高度なものがあればより有難いです。
- ・話される方、資料を作成した方の役職・氏名を明記していただけたらと思いました。ペン入力について参考になった。利用を検討したい。
- ・デモされたのは、ためになった。特に「Web上のシラバスの試み」はできるなら自分でも取り組んでみたいと思いました。
- ・シラバスをインターネット上にのせて、そこに様々な教材もダウンロードさせるようにするのは、インターネットさえ見れば授業についていけるということで、本来の授業の重みを低くすると思う。「Web上のシラバスの試み」には疑問がある。
- ・ITを活用したシラバスの登録方法を導入され、いろいろと改善をはかっているなあと、感心しました。省力化、コスト削減にご努力下さい。
- ・Web入力（シラバス）。
- ・シラバスについての指針が今まではぼんやりとしか理解していなかったが、よく理解できた。

- 学生にすべてを教える事はよくない。
- とてもじゃないが、できそうにない
- 「授業の到達目標」の設定及び「多元的成績評価」を重視するセンターのスタンスがよく示されていたと思う。装置の不備が一部にあったが、全体としてテキパキと密度高く進行され、調査研究部の努力がうかがえた良い企画だったと感ずる。よほどシニカルな教員でなければ、何か得るところのあったFDとなっていたのではないか！
- 共通教育の成否は、教員の教授能力、(授業方法・技術) によるところが大きい。教員個々の教授能力の力量を高める方策として今回のような研修会はきわめて有効である。
- それほど参考にはならなかった。時間がみじかい。
- もっとテーマを絞った研修会にする方がよい。(全学共通教育に対する共通認識を醸成する段階であるために、総花的にならざるを得ないのかもしれませんが。)
- 昨年度につづき参加しました。そこで、複数回参加した者の立場から、初めて参加する者が出席すべきパートと、複数回参加することになる者も合わせて出席すべきパートとを分けて欲しいと思います。そうすれば、同じ事を二度聞くことから生じる時間のロスを防ぐことができると思います。
- 毎年担当なのだが、この研修会に毎年出なければならぬのか？この時期に毎年はかんべんして欲しい。
- 休憩は必要です！
- もっとゆっくり、じっくり休憩も入れて説明してほしい。Web入力不安。
- 昨年の分科会(?)より、今回の形式の方が合理的で良い
- 盛り沢山の内容で、重要な会議であると思う。二日位に分けて開催されてもよかったのではないかと思う。(テーマをしぼる方がよいのでは。) 2時間余の会議場としては空気の入れ換えなどがあればよいと思う(思考力の低下)。
- IT教育など参考になりました。ありがとうございました。問題点、議論点が出しっぱなしで、方向性もなく終わったのは心残りでした。
- 不可の採点について明確にしていきたいのですが。
- 討論のできないような教員がいるとは驚きでした。

B. 今後、香川大学の教育FDにおいて企画して欲しいテーマなどがありますか。

(複数回答 N=50)

	%	N
研修会・ワークショップのテーマ		
3. 授業でのIT技術活用技法	39.1	18
4. 学生の評価の仕方	30.4	14
1. 講義方法	23.9	11
5. 学生の指導方法	15.2	7
2. 討論技法	13.0	6
6. 教員と学生との関係作り	8.7	4
9. 大学教育(全体)のあり方	8.7	4
8. カリキュラムの組み方	6.5	3
7. 卒業論文の指導方法	2.2	1
10. その他(具体的に)	2.2	1
◆最近の香大生気質概説と対応策		
その他企画		
1. 授業参観	21.7	10
3. 優れた授業や教育改善に対する報償	10.9	5
2. 授業改善のための相談窓口	2.2	1
4. その他(具体的に)	0.0	0

C その他、本研修会や教育FD活動、本学の教育に望むことなどございましたら、ご自由にお書きください。

- ・教養教育担当者の意識をもっと高めるべき。(情熱を持って!!) 学生がこの大学の教養科目の程度について心配していた。
- ・説明会に出席できて良かったです
- ・全学共通科目の大まかな意義のようなものが共有できたら、と思います。
- ・主題科目は廃止すべきだと思う。
- ・外国語教育、授業科目に韓国語を加えること!理由は、日本と東アジアとの関係は深く長い歴史有り、香大の場合、中国語は充実しているが、韓国語が科目として今もないのは不思議であると思うが如何?
- ・比較文化的発想。日本とどこか外国との文化の比較研究が国際化時代に必要なことと思われるが!
- ・初修外国語に是非、韓国語(朝鮮語)を加えてください。日韓の関係がこれほど緊密になった今日、隣国の語学が学べない(学生の要望(希望)はかなりあるように思います)現状は、極めて不自然です。外国語部会の先生方は、どう考えられているのでしょうか。
- ・授業開始前に、コンピューターによる受講調整をして下さい。そうすれば、1回目から授業に

入れます。

- 受講調整について。共通教育部長が言われた調整手続きとは異なる手続きを取った授業があったようです。第1週の授業時間内に受講調整を完了せず、次週に発表した結果、受講の可否が不明となり、結局1科目受講出来なかった。ハンドブックP6の記述をより詳しくするなどの周知徹底をお願いします。
- 出席カードが設けられたのは良いことですが、データ処理のシステムはサポートされないのでしょうか。結局手作業でやれということですか。
- 全期間を通して受講するのが当然でしょう。出席数のチェックは1~2は減ということでしょうか。
- 12月4日の会議への出席があまりよくなかったというお話がありましたが、案内がゆきわたっていなかったからではないのでしょうか。案内状には出欠の項目を設けられて、事務係に提出するような、手続きがあればよいのでは。
- IT教育の結果として学生の質向上（IT情報による教材の充実化＝学習効果の向上）は実績として証明されているのか？
- 学生は本当に教育中心を望んでいるのだろうか？教育にもゆとりが必要なのではないか？
- 学生の香川大学の制度や授業に関する、希望、授業、評価等の客観的なデータなどを種々、紹介してもらいたい。又、それと課題の教育の向かう方向との切磋たくまなどを討論していただきたい。
- 授業でのIT技術活用技法についてFDを実現して欲しい。講義室の改善 ex 611、621、821、822、etc 暗い、きたない、機器が使いづらい。
- プレゼン・話し方についての講習会をFDとして開いて欲しい。
- なるべく短時間でお願いします。
- 委員会？の構成図、メンバー表などはないのでしょうか？
- 我々は、自分の授業をうまく行うことにいっしょけんめいになっています。全体的なこと、また、それぞれの科目をうまく行なうための事務的作業のアシストなど、よろしくおねがいたいです。
- 自分にできることしかない
- 「講義」と「授業」が混同されているので、「講義」に統一した方がよいと思います。高校ではないので。着任当初、かなり違和感を持ちました。
- 学生レベルの教員をなんとかした方がよいのでは？